

# 春風と共に

Earnest

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、とある宇宙人と、とある神様の、なんてことのない日々のお話。

※この作品は現役 *Viewer* の許可の下に作成されたフィクション、二次創作です。キャラ改変・崩壊・オマージュ等ありますが、実在する人物・地名などは一切関係しません。ご了承ください。

# 目次

プロローグ	1
第1章 ー告げる冬の歌ー	5
第2章 ー暖かな今ー	16



## プロローグ

歌が聞こえる。

遠い遠い、とても遠くから響く歌が。

とても綺麗な歌だ。

綺麗で神々しくて、どこか切ない。そんな歌。

その歌に呼ばれる様に、僕はここがどこかも分からないまま歩いている。  
周りは白い。

一面、白い世界だ。

ただただ白く、広い場所だ。

太陽も月も、地面も空もない。

そんな空間を歩き続けている。

どれくらい歩いたのだろうか。

たったの数分か、それとも数日か。

この場所では時の流れを知ることができない。

歩いて歩いて、歩き続けて。

ふと気づいた時には、歌が良く聴こえる場所にたどり着いていた。

ここは草原、いやわずかに白く残る雪を見るに元は雪原だろうか。

冬が去り、花々が芽吹き始める春の草原といった様子だ。

空から暖かな光がさし、風が舞う草原。その中央に、一本の巨木が立っている。

歌は、そこから聞こえる。

巨木の下へ、歩みを進める。

歌はより鮮明になり、少しずつ冷たくなり肌を刺す風に乗り、その調べを運んでくる。

『ああ友よ。なぜ君は逝そらつてしまうのか。

その魂を死神に抱かれ天へ旅立つ友よ。

なぜ君は私と友になったのか。その理由を君に問う機会は、もうない。

ああ友よ。どうして涙が出るのだろう。

人の子の旅立ちなど幾度も見てきたというのに、なぜ嗚咽が出るのだろう。

ああ友よ。どうして僕を一人にするのか。

ずっと一緒にいると、共にそう誓ったはずなのに。どうして。

ああ、友よ。

なぜ、君は逝ってしまうのか』

歌に乗せた風が、吹雪が、拒絶する様に吹き荒ぶ。

だが、突き進む。

歌が、呼んでいる。

僕を、呼んでいる。

無我夢中に風をかき分け、嵐を抜けた先は巨木の下だった。

暖かい春の原っぱだ。

独り立つその根本には歌の主が、1人の誰かがいた。

首の後ろで一本に結ばれた水色の髪。右眼は同じく水色で、左眼はエメラルドを思わせる緑。そして黒の和服はゆったりと体を包んでおり、青年と思われる彼をその幼げな顔立ちも相まって、まるで少女の様に見せている。

木に腰掛け歌を紡ぐその姿は凜としており、神々しい。

僕は彼に歩み寄り、彼はその気配に気づいたのかこちらに顔を向ける。

「おや……ここに人の子とは珍しいな。また『夢』のヤツが適当な仕事したのかな……」

少し困った表情を浮かべる彼に、あなたは誰かと僕は問う。

「僕は君たち人の子の神様。神様だよ神様。偉いんだぜ？」

えらい、かみさま。

なぜかフワフワして回らない頭で彼の言葉を飲み込もうとする。

「そう、神様さ。そしてここは僕の大事な場所。君は今、僕の大事な場所に誘われた夢を見ているんだ」

ゆめのなか？

僕は子供の様に首を傾げる。

そうだよと、彼は微笑む。

「そう、ここは夢の中。そしてそれに気づいた君は、もう目覚めないといけないよ」  
彼がそう告げる同時に、僕の体がフワリと浮いていく。

空の眩しい光が、僕を包んでいく。

待って。

そう言って彼に手を伸ばすけれど、体は手放した風船の様に空へ昇っていく。

目も眩む光の中、最後に見た彼の姿は。

「夢は、覚めるものだから」

少し、寂しそうだった。



# 第1章 ー告げる冬の歌ー

優しいメロディが部屋に流れている。

ゆつくりと重い両眼を開けると、見慣れた天井がある。

音楽を奏で続けているスマホを手に取り、アラームを止める。

目を細めて液晶に映る時間を確認し、鉛の様な布団をどかしてムクリと起き上がる。

こみ上げてきたあくびを我慢せず漏らし、1つ伸びをして一言。

「…月曜か」

言外に仕事の日であると認識して、骸見<sup>むくろみ</sup> 矢具<sup>やぐ</sup>は深くため息を吐くのだった。

|||||

「オハヨーゴザイマスー」

未だに眠気の残る頭で気の抜けた挨拶をする。

もうすでに「帰りたい」「ゲームしたい」「何も考えたくない」と訴える脳が足に直談判しているのか、一步一步が絶望的に重い。

やっとの思いで自分のデスクに着き、ドサリと腰を下ろす。

隣のデスクに座っていた男がこちらを見て、憎たらしいまでに元気な笑顔を向ける。

「よう矢具、おはよう」

「おはよー…」

片手をヒラヒラと振って挨拶をする彼に、まるで覇気のない声で返事をする。

あまりに元気がなさすぎに見えたのか、彼は怪訝そうに俺の顔を覗き込む。

「どうした、えらい眠そうだな。寝不足か？」

心配してくれる彼を他所に、ぼんやりとした頭で昨日の事を話す。

「んあ…朝から4時くらいまでずっとゲームしてた…」

「ああ、なるほど…」

個人的にマイブームであるFPSゲームを深夜までやっていたのだと理解した彼は、

呆れの混じった視線を矢具に投げかける。

彼の名前は赤根あかねまさる勝。

矢具の同僚で、同じゲーム好きの友人だ。

「ほら、眠気覚ましにガムやるからシヤキツとしな」

無造作にポイツと放られたガム1つを受け取り、口に運ぶ。

少しずつスツとしてくる呼吸を感じながら、稼働し始めた頭を懸命に回す。

ゴキゴキと首を鳴らし、「うし」と言っただけ矢具は仕事に取り掛かった。

|| || || || ||

「そういえばさー聞いてくれよー」

「あん？」

対面の席で少し細長いトンカツをかじる赤根がこちらを見る。

仕事を終えた2人は夕食の席を共にしていた。

カツを噛みちぎってゴクリと飲み込み、矢具に向き直る。

「んで、何さ？」

話をするように矢具を促す。

「今日の朝にさ、オレ夢を見たんだよ」

「はあ、夢ですか」

「そう。で、その夢ってのが…」

今朝の事を懸命に思い出しながら夢の内容を話す矢具を、赤根はウンハアナルホドと  
うなずきながら聞いている。

「…って夢だったんだよ」

「へーえ？そりや不思議な夢だねえ」

やがて矢具が話し終えると、赤根は味噌汁をすすりながらおどけた調子で肩をすくめ  
る。

「個人的にはその歌ってた自称神様の詳しい事を知りたい所だけど…」

そう言うと、矢具は眉を下げて困った表情をする。

「さあ：それは分からんけど、なんというか、懐かしい感じがしたんだよなあ」

「懐かしい感じねえ」

矢具が話を続ける。

「しかもだよ？」

「何さ？」

「この夢、初めてじゃなくて、オレ小さい頃に一回見てるんだよ」

興味深そうに赤根が口の端を少し上げる。

彼はこういったちよつと非日常的な話が好きだ。

「なるほど？ 同じもんを？」

「同じもんを」

へーえ？ と面白そうに笑う。

「たまに聞くよな、そういうの」

「不思議じゃね？」

みじん切りのキャベツの山を苦そうに見て、まとめて口の中に放り込んだ赤根が口を

開く。

「不思議だねえ」

矢具がデザートの杏仁豆腐を食べ終わると、赤根も「ごちそうさまでした」と言つてコップに残つた水を飲み干す。

「まあそういうのは、なんか面白いことの前触れだったりするのさ。多分」  
「多分つて…」

トンツとコップをテーブルに置いて、赤根は愉快そうに笑つた。  
「そうさ面白い事だ。たとえば、なんかのお告げだったりしてな」

|| || || || ||

コツ、コツと足音が静かに響く。

車も通らない夜中の暗い路地を、矢具は一人歩いて帰つていた。

「お告げ、ねえ」

赤根が笑いながら言つた『面白い事の前触れ』

お告げという単語が、あの夢から感じた印象と妙にしっくりくる。

だがそれと同時に、何か違和感も感じていた。

「…なんだかなあ」

後ろ手でポリポリと頭をかく。

合っているのに何かが違う。

そんな謎の感覚に陥つた矢具の頭は混乱し始め、やがて考えることをやめた。

壊れかけの電灯に照らされたアパートの錆びた階段を踏みしめながら上がっていく。

ああ帰ってきた、これを上り切れば家だと、そう思いながら。

すると。

「……ん？」

点滅を繰り返す灯の下、ポツリと一つの人影が映し出されている。

矢具の家の、扉の前に。

「……んん？」

奇妙に思いながらも、近寄らねば家に入れない。

できるなら無視できますようにと、足音を殺しながらゆっくりと近づく。

扉に手が届く、ついでに言えば影にも手が届く距離まで来て、ついに影の肩がピクリと動いた。

俯いていた顔を上げて、ゆるりとした動きで両目をこちらに向けてくる。

ジジ、と古びた電灯が目の中の影の姿をその薄明かりで映し出す。

まず、こちらに向けているその両目はおそらく左右で色が違う。片方は水色で、片方は黄緑だろうか。なににせよ珍しい眼の色をしている。

次に顔つきは幼い。高めに見積もっても20歳はたちと少しが良いところだろう。

パツと見は青年少年に見えるが、首の後ろで1つに結ばれた長く青い水色の髪とパツリと開いたその両目、そして幼い顔つきは女性のようにも見える。

極めつけは彼？の纏うその和装だ。

その身を包む黒色を主とした和服はこの夜闇に溶け込み、やはり影のようなイメージを覚える。

身体のラインもわかりづらく、より中性的な印象を際立たせている。

そもそもなぜ和装なのか。京都でもあるまいし。

「あの……」

様々な思考を駆け巡らせていると、彼の少年のように高い、しかし男性らしい声が耳を震わせてハツとする。

いけない、初対面の子供？をジロジロと見るなんて、一步間違えなくても事案になりかねない。

「わ、悪いジロジロ見ちゃって。ちよつと珍しい格好だなんて思つて」

彼についていろいろと疑問の残る所はあったが、すでに混乱し始めている矢具にそれを考える余裕はなかった。

様子を見ていた彼は慌てふためく彼の姿を見て、困つたように笑つた。

「すいません、事情は話しますので、できれば中に入れていただけませんか……？」

|| || || || ||

「親戚の子だつて？」

「ザツクリ言えばそうですね」

狭いアパートの一室で初対面の大人と子供が言葉を交わす。

字面だけ見るとなにやら不穏なイメージを覚えるがその実、身内間で行われるただの説明会であつた。

矢具の親戚で男子高校生と名乗る彼は事情説明を続ける。

「僕は矢具さんの母親の妹の子供なんです」

「母さんに妹なんていたんだ…」

「両親はあまり関わりが多い人ではなかつたようなので、知らないのも無理はないでしょう」

呆れのこもつた声色で彼は言う。

「それで？」

「え？」

「俺との関係性と君の身分は今聞いた。それで、君はどうしてここに？」

彼が口をつぐむ。

言いづらい事なのだろうか、しかし聞かなければ受け入れる事はできない。



青少年拉致監禁なんて誤解された日にはたまったものではない。

自分と彼が真つ赤な他人でない事は理解した。

だが、それがここになる理由として完璧かと言えばそうではない。

目的を、事情を聞かねば判断する事はできない。

いたつて普通の、正しい大人の思考であつた。

彼はやがて口を開き、極めて誠実に話し始めた。

いわく、両親が事故で他界してしまった。

いわく、母の姉である矢具ママに引き取られるも、矢具の両親もしばらく家を空けねばいけない。

いわく、「学校からの距離もそんな変わらないから、矢具のところで世話になっておくれ」と言われたと。

そんなところであつた。

ふーむと多少の困惑をにじませながらも納得する。

何かと便利な地元を好み、近くのアパートを借りている矢具。

子を思い極力環境を変化させないようにした母の行動は、なるほど確かに正しい。

一声かけてくれ、しつかり相談してくれ等、多少の小言は言いたい所だが…。

矢具は自分を納得させるように深く頷いた。

「うんわかった。いいだろう！」

パツと彼が顔を上げる。

「それじゃあ……！」

「ウエルカム矢具ハウスってな！多分短い間だろうけど、この狭つくるしい部屋と共に君を歓迎しよう」

両手を広げて芝居かかった歓迎の台詞を口にする矢具。

それを見て彼はようやく肩の力を抜いたようだった。

「よかった……」

初めて見る、彼の子供らしい一面。

実にわかりやすい安堵の表情だ。

大人になりかけの高校生とはいえまだ成人もしていない子だ。

そんな子が突然両親と永別し、ほぼ赤の他人の親戚にたらい回しにされたのだ。

目まぐるしい状況の変化は、きっと彼にとってかなりの不安の元だったのだろう。

そんな彼を少しでも助けられたのかもしれない。

そう思うと、自己満足ながらも笑みが浮かんだ。

「そういえば名前聞いてなかったな。なんて言うんだ？」

彼は質問に再び凜とした表情を貼り付け―頬の緩みが隠しきれないが―名前を告げた。

「僕はコユキ。暇川ひまがわ 小雪こゆきです。これからよろしくお願いします、矢具さん」

これが彼らの出会い。

ただの社会人とただの高校生の第一接触。ファーストコンタクト

彼らはまだ、自分達の胸の内に芽生えようとしている暖かなものに気づいていない。彼らを繋ぐそれに気づいていない。

微笑み合う彼らの家の外で、夜風が吹いている。

一粒の雪が舞い落ちる冬の夜風が、天からの歌を奏でていた。

## 第2章 一暖かな今一

聴き慣れたメロディがいつもの通りに頭の中に響く。

アラームを止め、時刻を確認。

何も変わらないいつもの流れだが、起きた時間はいつもより少し早いアラームだったようだ。

冬場の朝というものは、なんとも辛いものだ。

肌をチクチク刺す朝の寒気と、矢具を捕らえて離そうとしない布団のぬくもりを感じながら思う。

まるで布団が「もう一眠りしてもええんやで？」と囁いてくるようだ。

しかし、矢具は知っている

布団から囁かれるこの誘惑は、悪魔からのものであるのだと。

これは矢具のみならず、誰もが知るところであろう。

恐ろしい布団の魔力から解放されるべく、必死に毛布を押しつけて脱出を試みる。するとだ。

腰の辺りに妙な違和感に気がつく。

なにか、謎の重さがある。

まさか本当に布団が逃すまいとまとわりついているのか、なんてトンチンカンな朝のボケた思考で毛布に覆われた自分の腰辺りを見る。

なんか、毛布が不自然に、盛り上がっている。

「…ああ、そういうやそうか…」

合点がいった様子で矢具は、一思いにその毛布を剥ぎ取る。

そこにはやはりというべきか、美少女と見間違えるほど中性的で美しい美少年が、矢具の腰に腕を回して抱きついていた。

無慈悲なまでに一気に寒気に襲われた細い体がブルリと震える。

「ん…」

毛布の代わりに近くにある熱を寄せようと、より一層人肌のぬくもりを求める腕の力がギュツと強くなる。

まだ夢の世界から解放されていないようだ。

一昨日は小雪の来訪が急すぎて、昨日は仕事に疲れすぎて、あまり小雪をじっくりと見る機会がなかったが、改めて見ると本当に少女の様に見えてしまうほど綺麗だ。

男子高校生であると本人の口から聞いているし、事実彼の声質や雰囲気は男子のそれに近い。

小雪は男の子だ。理解はしている。

しかし、しかしだ。

彼の今の姿はとも男のそれではない。

普段着の和装の代わりに、大きめのTシャツと少しダボついたジャージを身につけ、自分の腰に華奢な腕と体でしがみつくと小雪が男に見えるだろうか、いや見えない。

ふと、朝っぱらから何を考えているのだと正気に戻った矢具。

少し早いとはいっても朝は朝だ。

いい加減起きねばならない。

可哀想にも思ったが、しがみつくと小動物の様な小雪を引き剥がして布団に転がす。

その衝撃のせいか、さすがに目を覚ましたようだった。

目を眠そうに薄く開ける小雪は、コチラを認識すると目を細めたままニコリと微笑む。

「あ…矢具さん、おはようございます…」

まるで新婚さんの様だなあ。

そんな思いが頭の中を横切るが、間違っても口に出したりはしなかった。

同時に自分は今、人によっては死ぬほど羨ましがられる状況にいるんだなあ、しみじみと思った。

そんな社会人と高校生の、なんて事のない平日の朝であった。

|||||

ガタゴトと、電車の振動に矢具は揺すられている。

いつもならこの振動を揺りかごの様に見立てて1眠りに落ちる所だが、今日は不思議と目が冴えている。

いつもと変わらぬ電車内であるが、今日は幸運にも座る事ができた。

今日は何かという日だなあと、立って欠伸をしている他の通勤者を見て、内心で勝ち誇る。

電車が駅に止まり、人の波が流れ込んでくる。

最初に入ってきたスーツ姿の男性が電車内を見渡し、席が埋まつてる事に気づいたのか小さくため息をつく。

矢具はその姿をしめしめと見ていた。

「ううっ…」

が、そこで矢具は正面から聞こえてくる呻き声に気づく。

不思議に思つて顔を前に向けると、そこには壁に押しつけられている1人の女性が。そのお腹は少し不自然に膨らんでおり、おそらく妊婦なのだろうと推測する。

手慣れた様子でお腹だけは押されないよう、器用に体をそらしているが、浮かべてい

るのは苦悶の表情だ。

ふと、自分の首をグルリと回し、後ろを見る。

そこには壁と窓から見える景色が広がるのみで、特に変わったものはない。優先席ではない。

チラと隣に座る女性と向かいの席を見るが、皆が皆見るからに熟睡しており、起こすのが悪く思うほど起きる気配は皆無である。

色々な思いが頭の中を掠める中、意を決して矢具は鞆を持つ。

目の前の女性の肩を軽く叩く。

キョトンとした表情で振り向く彼女に、自分の座っていた席をポンポンと叩いて示し、「どうぞ」と小声で促す。

女性は一瞬驚いた表情を浮かべ、申し訳なさそうに、けれどとても嬉しそうに、何度も頭を下げて席に座った。

彼女は壁にもたれかかり、ようやく一息つけたようであった。

矢具は微笑んで、窓からの見慣れた景色を眺める。

「(今日も、座れなかったな)」

己の不幸を呪う思考とは裏腹に、心はどこか軽かった。

|| || || || ||



「よう、矢具」

「おう、おはよう」

清々しく元気な笑顔と相変わらず力のない挨拶が交わされる。

同じ会社の同僚で、そこそこ昔からの友人で、同じゲーム好きであるのに、どこでどのような差がついてしまったのか。

某テレビ番組に聞いてみたいくらいだ。

いつものように笑顔でコチラを見ていた赤根が、少し不思議そうな顔で話しかけてくる。

「今日は珍しく頭が起きてるみたいだな、矢具」

「え？」

思わず間の抜けた声が出る。

言われてみればそうかもしれない、と妙にハッキリした頭で思う。

いつもなら仕事を始めて1時間後、体が少し疲れ始めた頃によく回ってくるくらいであるのに。

考えてみれば、今朝妊婦さんに席を譲ったが、社会人になってから電車で席を譲ったのは初めてだった気がする。

働くようになってから、電車は立って押されるか、駅まで眠るものだったから、周り

を気にしている余裕がなかった。

けれど、今日は彼女の存在に気づく事ができた。

席を譲るといふ判断を行う事ができた。

矢具はなんだか自分を不思議に感じて、己の身体を見渡した。

自分の体だ。当たり前だ。他人のではない。

だが、矢具はそれでも、自分の体でない気がして身体を見続けた。

そうしていると、トンツと背中を押されてハツとする。

赤根がニコニコと笑いながら矢具を見ている。

「まあ何かあったのかは知らんが、それはきつと、いい変化だぜ？」

多分な、と付け加えた赤根は友人の成長を祝つてか、嬉しそうに笑つた。

その綺麗な笑顔を見て、矢具もまたニカリと笑つて彼の背中を叩き返す。

「そうやってハッキリしねえからお前は彼女ができねえんだよ」

「いってろ」

お互いに軽口を言い合つて、ニヤツと笑う。

仕事場での、少し和やかなひと時であつた。

||||||

「ただいま…つと」

暗闇に誰にも聞こえない声がボソリと呟かれる。

一人暮らしをするようになってから、はや数年が経っている。

短かったようで、長かった気もする。

1人になってわかった事は、多くある。

一人暮らしの自由さ、自由すぎさ。

家族の大切さや、生活の大変さもだ。

矢具に関しては、実家は行くのが少し億劫なだけでそれほど離れておらず、帰ろうと

思えば帰る事も自由であるから、多少はマシな方であるだろうが。

「まだ、帰ってないのか…」

自分の脱いだ靴だけがポツンと置かれた玄関と、閉め切られて月明かりすら差し込んでいない真つ暗な部屋を見て察する。

「なんか部活動でもやってんのかな…高校生だし」

部屋の電気をつけながら、今頃の小雪を勝手に推測し始める。

野球やサッカー、バスケットだろうか。

いやあの女子と見間違えう細い線の体で当たりの強いスポーツはないだろう。となる  
とテニスか。

調理製菓や吹奏楽といった文化部の線もある…。

あーでもないこーでもないと妄想を捗らせていると、不意に玄関からガチャリという音がした。

その音で正気に戻った矢具は、小走りで玄関へと向かう。

きつと疲れているだろう。重い鞆があるだろう。持つてあげよう。

内なる父性、いや母性？がくすぐられている様子の矢具。

パタパタと走る様は、さながら同居したての若妻か。

彼の心情的には、孫を迎えるお爺ちゃんといった所か。

「おかえりー！」

「わっ!? た、ただいんです」

一昨日と昨日の比較的ダウナー寄りの矢具しか知らない小雪にとって、謎テンション矢具のご登場は予想外であったのだろう。

想像できなかつた、あまりに元気なお出迎えに思わず驚いてしまった、といった様子だ。

硬直している小雪を他所に、何故か上機嫌な矢具は当初の目的を果たすべく、小雪の手持ち物をひつたくろうと、もとい預かろうと手を伸ばす。

「え、あつ」

瞬く間に両手にあつた重みが消え、脳処理が追いつかない小雪が間の抜けた声を出

す。

「おっ！」

と、ここで矢具は小雪から預かった荷物が妙に軽い事に気がつく。

重いことは重い、が、矢具の記憶にある様な学生鞆的な重みではない。

自分が手にしている物を確かめるため、手元に目を落とす。

多量の物が入ったグチャツとした重み。

重力と共に手に食い込もうとする持ち手。

揺れるたびにガサガサと鳴る耳障りな音。

矢具が手にしていたのは懐かしの学生鞆ではなく、大人になって妙に慣れ親しんで身

近になってしまった、レジ袋であった。

中を開けて見れば肉や野菜、何かの素といった食料品だ。

なぜ食料品？と頭の上に疑問符を浮かべていると、小雪が不意に口を開く。

「あの…矢具さん、僕、実は料理が、というか家事がそこそこ好きでして…」

「ほえーだから食料品なんて買ってきたのか、なんか納得」

のんきな声でなるほどと思う。

小雪の言葉は続く。

「失礼ながら台所を見せてもらった時に、大量の弁当ゴミと、明らかに使ってなさそうな

お皿達を見てしまひまして…」

「ほんほん…ん？」

そこで何やら背中中に這い寄る不穏な空気を察知して顔を上げる。

そこにはニツコリと、満面の笑みで立つ小雪が。

「ちよつと職業病というか、我慢できなくて…」

可愛らしく申し訳なさそうな表情をしている小雪だが、矢具にはなぜかそこに角を生やした母がいるように思えて仕方がなかった。

例えるならそう、だらしない生活空間を親に叱られているような恐怖感…つてそのままではないか。

小雪本人に叱っているつもりは毛頭なかったのだが。

小雪の知らない所で勝手に錯覚し、勝手に焦り、勝手に冷や汗を流す矢具。

もしここに心を読める第三者がいたのなら、某芸人の勘違い芸のようだなあと、笑う  
事間違いなしだろう。

|| || || || ||

小さな部屋の中に肉の焼ける匂いが広がっていく。

仕事に疲れてグーグーと食料不足を訴える胃袋にとつて、鼻をくすぐるこの香ばしい匂いはまさしく暴力的だ。

横目にチラと見えるのは、白一色のマイエプロンを装着した男子高校生。絶賛調理中の小雪だ。

「僕が勝手に、好きでやるんで」といって座らされた矢具はスマホを弄りながら、その匂いと調理音に耳を傾けていた。

トントンと包丁で何かを切る音。

フライパンの上で何かが焼ける音、炒められる音。

「(こうしていると、実家暮らしの時を思い出すなあ)」

成人をしてから一人暮らしをし始めた矢具は、数年前の自分を思い出して郷愁の念にふけていた。

ああ無情にも時は経ってしまったのだ。

歳をとり、背丈は伸び、声は低く、心は変わった。

このように様々なものが変化しながら、それでも今もなお、「昔はよかった」と思い続けてしまうこの考えは、もはや一種の呪いではないかとすら思えてくる。

『昔』。

良い言葉だ。

人は日々未来を求めながら、同時に過去に縋り付いている。

今がどんなに辛くても楽しくても、『先』から見れば支えにもなるし、重りにもなる。常に矛盾を抱え、正義とかいう己が思想を秘めたまま朽ちていく。

自分勝手に、予測不可能で、非合理的。

それが人、人間という生き物だ。

もし。

もしこの世界に、あの夢に出てきた様な神様がいたら。

遠い遠い、もしくは近い何処かから、自分達を見ているのだとしたら。

母なる地球を我が物顔で闊歩する人間を、理解不能な人を、どう思っただ観ているのだろうか。

こんな事を考える自分を、どう見ているのだろうか。

妄想にすぎない、実に哲学的で無意味な個人の思想に思いを飛ばしている内に、できましたよーと高めの男声が耳に響いてくる。

現実に戻ってきて見れば、すでに目の前には料理が置かれている。

ホカホカという擬音がとても似合う温かそうな白米。

湯気と共にその良い匂いで胃のクーデターを引き起こしてくるとろみのついた肉野



菜達。青椒肉絲だ。チンジャオロース

眼前に並べられた料理を前に、ゴクリと唾を飲み込む。

向かいの座布団に小雪が座るのを待ち、共にパンと手を合わせて一言。

「いただきます！」

待つてましたと言うかわりに勢いよくご飯をかきこむ。

それを苦笑いしながらも嬉しそうに微笑み見て、小雪も箸を動かす。

ああ、なんと温かく、美味しいことだろう。

冷えたコンビニ飯に慣れた舌にとって、手作りの、温かで、美味しいご飯は、幸福以外の何物でもなかった。

小雪の作ってくれた飯を、小雪と一緒に食べる。

久々に、この上ない幸福であると感じた。

今、矢具が感じている限りない幸福感は、未来の重石になるのだろうか。

「あの頃はよかった」と縋り付くかもしれない。

あんな思いをしなければ—と思うかもしれない。

でも、でも。

きつと、こういう日が、こういう時があつて良いのだろう。

チラと正面を見ると、小雪と目が合う。

お互いになんとも言えずに見つめ合い、そのうちなんだか耐えきれなくなつて笑つた。

ああきつと。

こういう時があつて、良いのだろう。

だつてこんなにも暖かいのだから。

じんわりと、体の奥から伝わってくる熱を感じながら、そう思う。

社会人と高校生の、至つて普通の、暖かい食卓だつた。